
キャンディ・フェアリー

コスミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャンディ・フェアリー

【Nコード】

N9778W

【作者名】

コスミ

【あらすじ】

僕は、初恋と虫歯に悩む11歳。キャンディ・フェアリー、君は
いつたいたいなんだ？

1 甘い痛み・苦い出現

親指と人差し指につままれた、半透明でうす茶色のアメ。

そこに映る僕の顔は、悩ましく、険しかった。

どうしてそんな顔で悩んでいるのかと言えば、僕は、重度の虫歯だらけだから。もう、歯並びがピアノの鍵盤に見えるくらい。

そこに、こんなでっかいアメなんかが入って来たら……、刺すような歯の痛みに、鬼の形相でのたうちまわり、ずーっと悲鳴やうめき声が出ちゃうだろう。嫌な演奏だよ。

でも、それならなんでアメなんかつまんでいるのか？ まさか挑むつもりなのか？

……我ながら恐ろしいことだけど、その通りです。

理由は？ と聞かれたら、それは、このアメがすごく特別だからです。

僕の生きてきた11年の中でも1番特別だし、たぶんこれからの人生でもこのアメ以上に特別なアメは現れないと思う。

だってこれは本当に特別な、初恋だから。

「アメつくってきたの。食べてみて」

放課後、僕がいつものように勇気を出して「一緒に帰ろう」と彼女を誘おうと近づいたときだった。もう誘わなくてもさりげなく一緒に帰れるだろうけど、なんだか習慣になっているし、「いいよ」という言葉が聞けるから。

そしたら、今日はいつもと違う返事、意外すぎるセリフだった。気づくと、紙の小袋入りのアメを手に渡されている。驚きや嬉しさや疑問がごちゃごちゃして、僕は、彼女の顔とラビオリみたいにくらんだ小袋を交互に見るだけだった。

「1ヶ月遅れのホワイトデーだよ。韓国ではブラックデーだけだと彼女が言った。

……そう、もうおわかりだろう。彼女は、すこし変わっている。よどみが無くきれいな声は僕の心をくすぐり、話す内容はいつも頭を悩ませてくれる。切なくなるほどかわいいその顔を見ても、心拍数上がるだけで何も情報は得られない。彼女は涼しげな表情しかしないから。

「あ、ありがとう」

「いま食べてみて」

「えっ……」まさか、そうくるとは。本当に予測不能なんだから、まったくもう。

と、ちよつと喜んでる場合じゃない。

アメをなめることが僕の表情筋にどんな影響を与えるか……鬼が宿るのだ。鬼を彼女に会わせるわけにはいかない。

「いや、あの、家に帰ったら、にするよ」僕の下手なごまかし。

それでも、彼女はあっさり納得して「わかった」と言うと、すつと席を立った。

「他の人にも配ってくるから、先に帰るか、ちよつと待ってて」

「え……」

他の人にも……って、嫌な響きだ……あ、そうか、義理チョコならぬ義理アメだったのか、これ。

などと僕がしんみり立ち尽くしている間にも、彼女は男子たちに次々とアメを渡していた。だんだん、男子たちの方から集まるようになり、配る早さも増した。

エサに群がるサルどもめ！ そりゃ素敵なエサだけど！

歯ぎしりしたら鈍い痛みが、余計に顔をしかめる僕。だめだいけない、鬼は外。

「明日、感想楽しみにしてる」

彼女との別れ道。夕陽の中で彼女は言った。

一瞬、僕は身体が浮いたような気がした。記憶のハードディスクに焼き付けたい画を見つめ、僕は、鬼と闘う決心をした。

そして今、アメをつまんでいる。

キウイフルーツを半分に切ったような形。その断面だけがピカピカで、僕の顔が映っている。

ビビっているわけじゃない。アメとの別れを惜しんでいるのさ。本当だよ。

でも5枚くらい写真も撮ったし、もういただいてもいいだろう。

深呼吸。僕は勉強机に向かい、椅子の上で正座している。古い教科書の背表紙、星座の図表、ペン立て。最後に視線が止まったのは、小さなスチール缶だった。

ブラックなコーヒーの缶。これは、僕がちよっとした貯金箱として使っているものだ。それと、歯の痛みに襲われた時には、この缶を見つめるようにしている。砂糖が虫歯にしてみるなら、このブラックコーヒーはきつと僕の味方だ。苦いから飲めないけど。だけど、やっぱり見つめていると効くような気がする。

そんな、お守りのような缶を見つめる、おまじない。

僕は頭の中をブラック一色に染め上げて、ふと彼女を想い桃色に変わり、頭を振ってまたブラックに。と何回か繰り返した。「よし、いくぞ。いざ勝負……」

アメの向こうに、無糖、の文字。

この世に一切の糖類はあらず！

僕は、アメをぱくりとした。

舌の上に、この世ならざる味覚が広がる。

う、お、お、おいしい……！！

僕は、彼女の次に甘いモノが好きなんです。甘味バンザイ！

しかしこれは、素晴らしい味だ、ただのべっこうアメかと思っただけ、何らかの香りが絶妙に甘さと絡み合い、引き立て合い、ああ、僕を天上の花園へ誘うがとき美少女天使たちのハミングが首すじの産毛を撫でてくる。そして、飛び上がってきた地獄の猛獣が僕の頭部をガツプリと噛みしめて……。

「いだいっ！」

僕は目を開いた。その前は閉じていたかもわからないが、とにかく限界以上に目を見開いた。というより鬼にこじ開けられた。

「いだいだい……？」

そのとき、僕は奇跡を体感した。痛みを忘れて、黒い缶を見つめていたのだ。正確には、缶の上にいるモノを。

おまじないにしては、効きすぎだと思った。

あ、ども

缶の口に腰掛けている小さな女の子が言った。

「ぶっ！」

僕はアメを吹き出した。凄まじい速度で、缶に命中。

カーン！ コンツ、カロン……。コインはあまり入って

なく、缶はガンマンもびつくりの飛びっぷりを見せた。

発射の反動のせいか、僕は椅子ごと後ろに倒れている。

「な、え？ うそ、……え？」

痛がる余裕もなく、僕はしばらく腰を抜かしたままへたりこんでいた。

女の子……。確かにそうだった。

シヨートヘアで、すこしくせ毛だった。えりの高いブラウスのような白い服、ちっちゃな藍色のベストと紐のネクタイのような何か。飴色のハーフパンツは先細りでチェック柄。足にはくるぶし丈のブーツをはいていた。

……どうにも、精密な幻覚を見てしまったようだ。幻聴まで聞こえたし。

「あ、ども。って……」

あいさつか？ 表情もわりと平静だったし、いや、顔のつくりの良さは今関係ないよ。ちよっと気の強そうな感じで、そこがまたなんとも魅力的だとか、そんなことは思っていないし、ホントどうでも良いよ。

なんだか恥ずかしくなってきた僕は、そつと立ち上がりながら机の上を視界に入れていく。

「はあ……」たぶん、安堵のため息。

そこに、女の子はいなかった。

缶がもの悲しく倒れ、へこんだお腹を僕に見せていた。ご、ごめん。

そして机の端っこでは、アメが、恐ろしいことにまだコマのように回っていた。

僕は黙ってそれをつまみあげ、キッチンへ運んだ。水ですこしだけ洗い流し、空気が入らないよう丁寧にラップで包む。

そして、冷凍庫にしまった。

ばぶん、と閉じた扉をしばらくぼーっと見ながら、僕は頭の中の嵐が過ぎ去るのを待った。

やがて、恐る恐る部屋に戻り、机の上を確かめると……。

やっぱり、何もいない。

僕はまたため息をついて、ベッドに低空ベリーロールで倒れ込んだ。

意外なことに、眠ることができた。

2 再挑戦・再出現

歯の痛みを起こされた。

もう生きるなど言われているような気がしてしまう。慣れてはいけるけど。

1時間くらい眠っていたみたいだ。ゆっくりと、長いあくびをしたらすこし落ち着いた。ベッドから降りる気になれた。

母さんが帰って来ていた。今日は早いほうだ。買い物してないのかな。

その通りで、夕食は有り合わせのあれこれを使った挑戦的なメニューになった。

今日は、僅差で勝ちだね、と母さんは笑った。僕もそのジャッジに賛成した。とそこに、

「冷凍庫に変なの入ってたけど」

母さんが急角度で痛いところを突いてきた。「また変な実験クッキングしたの？」 呆れた顔をされた。怒られるよりはいいけど。

そりゃ、僕だって昔はいろいろ変な実験をしたよ、ちびゼリーを何個も使って、茶碗いっぱいにしちま模様のレインボー地層ゼリーを作ったこともある。でも今日のは、そもそも作者が違う。天才美少女パーティシエール特製の国宝級キャンディ（義理）なんだ。

「変じゃないよ。ちゃんとしたやつだよ」 僕は正論で対抗した。

「なんだか恥ずかしいけど、それ以上に誇らしかった。

「じゃあ食べなよ。ほっとくなら捨てちゃうよ」

「……はあい」でも結果はいつもと同じだった。

そんなわけで、僕はこのアメに再び挑むことになった。

天国の甘さ、地獄の痛み。

それが僕の指の間にある。

小学生には荷が重いと思います、神様さん。喜びか、恐れか、もう僕はわけもわからず色々切ないです。センチメンタルボーイです。

青春つぼくため息をつき、ひとまず倒れた缶を起こしてあげた。ジャラっとお金の音がした。

無糖。心頭滅却すれば火もまた涼し。無心になれ！

「いざー！」

僕は禁じられた楽園へ踏み出した。地獄の責め苦が科されようとも、僕は勇気と愛に死ぬ。

「ん、あまあーい……」

溶けてしまいそうだ。脳とかいろんなものが。痛みの中の甘美な一瞬は、光より早く飛び去ってしまう。それをすこしでも引き延ばそうと、僕は舌に全神経を注いでアメをくるんだ。歯にさえ触れさせなければ、しめない！ 地獄など待たせておけ！

た、助けてー……えふっ、ごほっくふん……

缶の中から悲痛なこもった声が聞こえても、地獄すらおとなしく待っているのだからちゃんと順番的に待ってて欲しいし、なんだか聞き覚えのある女の子ボイスな幻聴だからって僕はいま樂園満喫中なんだからホント邪魔し、な、い、でええええええって缶が揺れた！

「うぐっ」今度はアメを飲みそうになった。のどの変な場所で必死に食い止める。

ここ、から、出し……て

苦しそうな吐息が聞こえる。幻聴にしてはネガティブすぎるし、発生源が缶の中って……。

「うつつ、ごほ、けふ」僕もそれなりに苦しい。だからだろうか、シンクロしたりしてるのだろうか。

早くー……

弱々しい声だ、さらに細くなっていく。さすがになんだかわいそう。

「はあ……な、何？ 中にいるの？」

びくびくと怯えた小動物の声で僕がたずねると、缶が揺れて思わずのけぞった。

理解力！ 遅い！ えふっ、うあ……あほん、だら……

なんか怒られたし罵られた気もする。

「えー……？」なのですこし意地悪な声が出た。

早く、し、しろ

「えー？」はつきり険悪な声が出た。

ちが、今の、は、命令形じゃないよ、しぬ、から、このままだと私……しぬって、言ったの。だから、助けて、で、しぬえ

死を願われた気がする。でも、いい加減助けようか。ていうか何だこの状況。

「なんなんだ……どうすりゃいいの？」

広い意味で聞いてみた。上を向いて神様さんに。

缶きりで、開くでしょ……くほっ、愚鈍っ

なるほど。なにか難しいセキが聞こえたけど、とりあえずそれで缶は開けられるよね。いやあ、飲み物の缶を開ける発想はなかったなあ。しかしなんだよ本当に僕もう楽園か地獄に囚われちゃったりしてるんじゃない……ああ、アメあまあーい……あまあまパラダイス……。

ちよと……、早く、開けてっ……！

いよいよ死力を絞ってるっばいかすれ声になってきた。

「あ、うん、じゃ取ってくる……」

僕は口の中から意識をはなさず、歩いてキッチンから缶きりを持ってきた。

探すのに4分かかり、トイレに2分かかっていた。

お……っそい……！

「すぐ開けるよ」と言いながら、いざとなると缶へ伸ばす手が止まる。

「これ、なんなの？」

い、命を救う、尊い、行為……！

生命力も理性も限界な感じの声だった。言うことは正しかったから、「じゃ、やります」と僕は缶を開け始めた。すると、

「あ、だいだいだい……！」地獄の鬼がやってきた。びくつと手を引っ込める。

……

ついに缶からは、凄まじい怒気が溢れてきた。僕は、痛みと怒りの板挟みになった。

なんで僕がこんなめに……もう意味わかんない、あまいたい……。舌の力をふり絞り、アメを包みなおす。痛みは根性で我慢する。手を伸ばし、また缶を開けていく。カコ、カコ、と切りすすめ、ようやくほとんど一周した。あとは、怪我しないように起こすだけ。缶きりの刃を引っかけて、くいつと開けた。

ボケナス

ッ！

「わあ！」僕は眉間に、なにか光る弾丸を食らった。骨っぽい音が聞こえた。衝撃でめまいがして、視界が白けた。

「……くあああうう」

なによりまず痛いよもう内から外から……。

僕は強く目をつむり、ちらつく星と痛みがおとなしくなるのを待った。

この、おガキさんが……、君だよ君！

不穏な呼ばれ方をして、僕は目を開けてみた。怖いものこそ見てしまうのは、なぜだろう。だけど一瞬で目をそらし、僕はうつむいた。本能が危機を察知していた。

「はい……」

私は、君から殺意を感じました。だから私も君に殺意を抱いて良いと思います。どうでしょうか？

ああ……。

聞いてるんですよ私、ごめんねわかりにくかったかな？ 答弁する機能は、君に備わっているよね？ 考えを声にしてみてもよ

「はい……、あの、でも、僕、殺意はありませんでした」

ふーん。それじゃ、悪意は？

「はい……、無い、と思います」

うん、はっきりしてないよね。それって自分にウソついてない？

もう一回考えて、正直に言いなよ。別に怒らないから

ウソだ、絶対怒る。というか怒ってる。「本当に、無いです。た

またま、色々とあれなだけで……」

歯痛のせいで、必要以上に険しい顔になってきた気がする。まずいかも……。

なんかもう、反抗的だよね君。私って殺されかけたんだけどな
やっぱり捕まった。なんとか、ペースをこちらに……。

「ごめんなさい、反省してます。でも、ですね、僕も色々とわからないんです。あの、あなたって、その、何ですか？」

ここまで僕は、怒りの謎の小さな女の子を直視できていなかった。怖くて。

彼女は、立ってあるスティックのりに座って脚を組んでいる。僕はその足の先、神経質に動く靴を視界の端っこに入れていた。けど、質問と同時に思いきって全身を見た。

やっぱり、小さい。のりと同じくらいだ。でも、なんだか威圧感のせいか大きく感じる。5つくらい歳上にも見えるし。というかも
う、目が、怖いよ……。逆にクールなパターンだよ……。

歯の痛みはすこし忘れていられたけど、麗しの甘味を心に染み渡らせる余裕もなく、それこそ完全に忘れていた。アメはひたすら溶けていくだけだった。

3 長い痛み・怖い妖精

色々とわかってない……ね。それはそうでしょうね。わかってやるには残忍すぎる仕打ちだもの

ああ、語気がますます鋭くなっておられる……。刃のそれだ。

いい？ 私はね、どれくらいの長さか知らないけど、その固い牢獄の中で、たくさんの重い円盤に埋もれていたのよ……

思い出したのか、彼女は怯えたように自身を抱いた。よほど嫌だったらしい。声も震えていた。

いきなりそこに叩き込んでくれたのも、もちろん、君だし、キャンデイも吐きつばなしで私を無力化したまま閉じ込め続けて……ああ、何で、そんなひどいことするの？ 私は君に何か恨みを買うようなことした？ 何が悪かったの……？

今度は泣きそうに、すぎるように言い募る。その態度は、僕の心をてきめんに苦しめた。でも、なんだか誤解がありそうだし、なにより疑問が大量にあるから口を挟んでみる。

「なんかあの、僕がわからないのは、その、もっと根本的な部分についていうか……」

彼女は疑わしげに眉を寄せた。困ることに、瞳はうるんでいる。喋りにくくなつた。

「あ、あなたは、何者なんですか？」

君ねえ、それ、本気で言ってるの？

急に冷めたような聞き返し。突き放された感じた。

「すみません……」なんとなく謝ってしまった。

ウソでしょ？ そこから知らないの？ 本当に？ なんでよ！？ 知らないよ。こつちが聞きたいんだって。

「僕は、いま正直わけがわかりません」

私もよ！

えー……。

彼女は、居心地悪そうにあたりを見回し（なんか恥ずかしい）、そのあと僕の顔をじっと見つめ（もっと恥ずかしい）、最後に全身でため息をついた。

それじゃあ、まずね、私のことを教えるから
なんか、ドキツとしないでもない瞬間だった。

「あ、はい……」

私は妖精だよ

え……、う、うん、そう、まあ、そんな感じ、だよね。

「妖精……すか」

口にしたら、なんだか変な寒気がしてきた。だけど彼女は、すこし満足げにうなずいて言った。

そう、今はキャンディ・フェアリーね。ちゃんと飛べるんだからのりから飛び降りるようにして、ほら、と言う彼女は確かに、机に落ちるところか浮かんでいった。僕は呆然と、アメが音をたてて歯にぶつかるのも気づかず、目の前のイリュージョンに釘付けにされていた。

羽根もあるよ

と言いながら彼女は、僕の顔の正面で、くるっとターンした。なんだか、照れるくらいサマになっていた。

その背中に現れていた羽根は、イメージ通りのトンボみたいなやつじゃなく、プラズマ、いや、オーロラのミニチュアみたいな感じだった。形はツツジの花びらで、色は薄いイエローグリーンだった。
「わ……」

夢みたいな光景に、僕はため息混じりの声をもらした。と、痛み
のビッグウェーブに身体を折る。「うう、い……」

え、何やってんの君？

すこしだけ心配そうな声で聞いてくる妖精さん。僕は、時間をかけて顔を上げた。すると妖精さんが覗きこむように見ている、焦った。ごまかす余裕はなかった。

「虫歯……、なんです。僕」

言ってしまったと、すぐに後悔してきた。恥ずかしい。でも、お怒りをしずめるにはこのほうが早いだろうし。

なに……ムシバって？

「えっ？」

いやっ、ちょっと、怖い顔しないでよ　あなたにそれを言われるとは……。

「すみません」なんで謝っちゃうんだ僕は。「だってもう、痛いんです。すごく」

ムシバって、痛いものなの？

「はい。……あ、あの、妖精には虫歯とか無いんですか？」

と聞くと、妖精さんは強い目をして、溢れだすように早口で喋り始めた。

無いと思う。私はまだ、あまり君たちのことを知らないんだよ。

この場所のこともよくわからないし。見えたと思ったら君はなんか恍惚とした顔してたから、私はとりあえずあの忌まわしい穴の近く私もその点だけは迂闊だったと非を認めるけど　そこに座って気づいてくれるのを待って、それでようやく君と目があったら、ああ、あれは本当に怖かった……。いきなりキャンディを吹き出して、気づいたら私はあの中に閉じ込められて……

こらえきれない、というように首を振る妖精さん。ついに頭をかかえてしまった。

はああ、完全にトラウマ……

そ、そうですか……。僕も、この時間にトラウマが生まれそうです。

いや、それよりもこれ、どんな状況なの？　超絶精密な幻覚なのかな？

「あの、妖精さん」

ためらいは感じるけど、弱っているところに質問させていただく。ん？　そっぴや缶の中から出たとき、やたら元気だったのは何でだ……？

「まさか演技……、いや、そうじゃなく、あの、妖精さんってどんな人なんですか？」

自分でもおかしい質問な気がしたけど、とにかくおおまかに聞くしかない。

妖精さんは、わりとはつきり嫌な顔をしたけど答えてくれた。

私は、キャンディ・フェアリー

「え……缶入り・フェアリー？」

違っっ！

イテッ！ 眉間に頭突きされた……。

今なんか、意味はわかんないけどバカにしたでしょ！

手で頭部をかばいながら、僕は生存本能に従い、首を横に振った。

「そんな、いいえ」

本当に……？ なーんか君っておかしいんだよね

精神攻撃に切り替えてきた……。そろそろ泣きたいよ。

君、いまキャンディなめてるでしょ？ 私のことナメてんで

しょ？ とダジャレ的に責めてきそうな予感がしたけど、さすがに

それはなさそう。僕は正直に答えた。

「はい……あ、でも、もうすぐなめ終わりますから……」と一応保険をかけておく。すると妖精さんは、目を丸くして身体を硬直させた。空中で静止すると、生き物らしさと現実味がいつぱんに無くなる。

うわ、まずい

妖精さんは、なんだか焦りだした。何か用事を思い出してくれたのかも知れない。

君、私のことがこうして見えている理由、もしかして知らない？

詰め寄られて、今度は僕が焦る。近いのはちょっと、あれです。

「は、はい。知り、ません」

じゃあ聞いて！ 君がキャンディ と、そこでまた僕は奇

跡を目の当たりにした。というよりも、危機が去ってくれた。妖精さんが突然、消えてしまったからだ。

僕は何秒間か、呼吸も忘れていたみたいだった。しばらくしてま
ず、深いため息をついた。身体中に、酸素と生きる喜びが行き渡っ
たように感じる。

ふと僕は、他のことに気をとられた。

「あ……」

あの特別なアメが、もうなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9778w/>

キャンディ・フェアリー

2011年9月26日03時11分発行